



写真-1 メリケン波止場前交差点から鯉川筋を撮影（令和5年10月）

#### ■ 鯉川筋の下を鯉川が流れている

写真-1 は、メリケン波止場前交差点から鯉川筋を撮ったもので、この道路の下を二級河川・鯉川が流れています。写真の左端に写っている建物は神戸メリケンビル（旧神戸郵船ビル）ですが、明治時代初期、ここにアメリカ領事館がありました。そして、鯉川筋の東側（写真右手）は旧神戸外国人居留地です。

この交差点南西の歩行者溜まりに「神戸税関 萬國波止場」と書かれた銘板が埋め込まれた街灯が建っていて、その左側面には「メリケン波止場」と書かれた石板の下に、メリケン波止場の由来を記した石板が埋め込まれています。

なお、銘板の「萬國波止場」という名称は、戦前から戦中にかけて敵性語排斥の風潮の中で一時的に使われていたようです。



写真-2 街灯  
（背後は神戸メリケンビル）



写真-3 銘板  
「神戸税関 萬國波止場」

昔なつかし メリケン 棧橋  
ころは明治のはじめ  
ここに小さな突堤があり  
その先に浮き棧橋があった  
近くに、アメリカ領事館があったので  
人びとはアメリカ棧橋をなまべて  
メリケン 棧橋と呼ぶようになったのち、  
神戸港は出船入船が繁くなり  
世界的に発展したので  
その玄関口として  
長い立派な突堤を築いた  
世人は、ここを神戸の名所の一つとして  
メリケン波止場とよんで親しんでいる  
洲崎喜夫  
小野米吉

## ■ JR 東海道本線高架地点が鯉川の計画基準点

鯉川は、その源を神戸市中央区の堂徳山に発し、支川城ヶ口川（じょうがくちがわ）および追谷川（おいたにがわ）を合わせ、同区波止場町において神戸港に注ぐ二級河川です。流域面積は約 1km<sup>2</sup>、鯉川の法定河川延長は約 1.7km で、河口から山本通までの区間約 1.4km は暗渠となっています。

写真-4 は大丸前から鯉川筋を撮ったものです。前方の高架は JR 東海道本線で、そこが鯉川の計画基準点です。その背後に見える山は錨（いかり）山で、山頂付近に港を象徴する錨のマークが見えます。



写真-4 大丸前から鯉川筋を撮影  
(前方の高架が JR 東海道本線)

鯉川筋は、神戸市中央区の三宮・元町地区における南北方向の主要道路の一つで、鯉川の暗渠上に建設されたためにこの名が付けられています。また、鯉川河口の西側にかつてアメリカ領事館があったことから、大丸前交差点以南は「メリケンロード」とも呼ばれています。

## ■ 鯉川が交通を阻んでいるとして蓋をかける

明治以前の神戸は、兵庫港の周辺に市街地が形成されていた以外は、田畑の間に集落が点在する農村地帯でした。

慶応 3 (1867) 年に兵庫開港となり、生田川河口の西側に新たに港が建設され、その周辺に外国人居留地が造成されました。

居留地内部にはわが国初の煉瓦づくりの下水道が明治 5 (1872) 年に完成します。その後急速に市街化が進みますが、居留地外での下水溝は、従来田畑の間を流れていた溝渠を改築または拡築する程度にとどまっていた。そのため、流れも悪く、保健衛生上も不完全なものが大部分でした。

外国人居留地の西を南北に流れる鯉川も同様で、神戸元町商店街が作成している『元町マガジン』によると、鯉川が汚く腐臭を放つことで外国人からクレームが出るほどだったようです。

明治 8 (1875) 年鯉川に蓋をかける工事が行われていて、文字どおり「臭い物に蓋」をしたわけです。

一方、鯉川の蓋かけについて、『神戸居留地の 3/4 世紀』では、概ね以下のように記されています。



図-1 鯉川筋周辺の地図

鯉川は、もともと下水溝に過ぎないような小さな川でしたが、これが交通を阻んで困るというので、居留地の行事局（「居留地会議」の執行機関）から「工事の半額は負担するのでここに蓋をしてほしい。」という要請が出されました。県はこれを内務省に申請して 1,000 ドルの下付を受けました。不足分の 1,500 ドルは市民から出金するということとして、明治 7（1874）年 10 月、オランダ人建築家が開いた Bonger Brothers という建築事務所に請け負わせて工事に着手し、翌 8（1875）年 1 月に竣工しています。

その後、神戸市はしばしばこの下水溝（鯉川）を修理し、明治 42（1909）年に至ってコンクリート構造の暗渠にしたので、それ以後旧居留地との境はわからなくなりました。

『新修神戸市史・行政編Ⅲ～都市の整備』によると、「栄町通と海岸を結ぶ鯉川筋西側道路は明治 8（1875）年 2 月に竣工している」となっているので、蓋かけ完了後直ちに鯉川の西側道路が整備されたようです。

## ■ 山手と海岸を結ぶ道路整備が求められる

外国人居留地の建設の遅れから、その周辺が雑居地※<sup>1</sup>に指定され、その結果、見晴らしの良い山手一带に多くの外国人が住むことになりました。今も残る多くの異人館がそれですが、そこに住む外国人たちから、山手と海岸を結ぶ道路整備が求められることになります。何しろ既存の道路は幅 1 間（≒1.8m）未満の狭いものだったので。

加えて、明治 7（1874）年 5 月 11 日に神戸駅～大阪駅間が開業するとますます南北間の移動が不便になります。このため都市計画の議論が起こり、まず道路を整備することになりました。西国街道と海岸通の間に栄町通を、また同じく東西方向に山本通、上山手通、中山手通、下山手通、そして、南北方向に生田筋、三宮筋、諏訪山筋、再度筋、これらが明治 5（1872）年から 7（1874）年にかけて着工され、明治 20（1887）年代までかかってほぼ現在の原形が整備されました。鯉川筋もこのような流れの中で整備されたものと思われます。

では、鯉川の暗渠化や鯉川筋の道路整備状況はどうなっているのでしょうか。既述のとおり、河口から栄町通までは鯉川筋西側道路が整備されましたが、栄町通以北は不明です。そこで、明治 36（1903）年 6 月 15 日発行の「神戸市新図」のほか大正 2（1913）年、大正 9（1920）年、大正 10（1921）年、大正 11（1922）年、昭和 8（1933）年発行の地図を、神戸市立中央図書館でわざわざ書庫から出してもらって閲覧した結果、明治 36（1903）年時点ですでに山本通まで暗渠化（蓋かけ?）されていることが確認できました。

なお、閲覧した地図を見ていると、すべての地図で鯉川筋の表記が穴門筋になっていました。これは、東海道線が高架化される以前、南北の行き来は地下道だったことから穴門筋という呼び名がついたようです。鯉川筋と呼ばれるようになったのは、おそらく神戸駅～灘駅間の高架化第 1 期工事が竣工した昭和 6（1931）年以降と思われますが、昭和 8（1933）年の地図はまだ穴門筋でした。高架化により穴門（地下道）がなくなったことから、穴門筋は鯉川筋に呼称が変わり、鯉川筋の 1 本西の短い区間を穴門筋と呼ぶようになったと思われます。そして、同年 10 月 10 日に高架化に併せて三ノ宮駅が現在の位置に正式移転しています。

※1 雑居地：外国人居留地造成の遅れを受け、明治政府は区域を東は（旧）生田川、西は宇治川、南は居留地南の海岸、北は山麓と限定して、外国人が居留地外に居住することを認めた。この区域を雑居地といい、明治 32（1899）年の居留地返還まで存続した。

## ■ 蓋かけ後の鯉川筋とアメリカ領事館跡地の変遷

写真-6 は、明治時代初期～中期、メリケン波止場から居留地西側の境界・鯉川筋を撮ったもので、明治 8（1875）年に蓋かけされた鯉川の吐口が見えます。左の建物は、明治 4（1871）年、アメリカ領事館跡地に建てられたヒョーゴホテルです。

明治 4 年 5 月 18 日（1871 年 7 月 5 日）の台風に伴う暴風雨による異常な高波（当時は「大津波」と呼ばれた）により「居留地以西の海岸一帯で原形をとどめる建物はほとんどない」状態となり、居留地前の岸壁はすっかり破壊され、居留地の被害は甚大だったそうです（写真-5 参照）。

建築中だったヒョーゴホテルも、建物の土台が掘り崩されベランダは破壊されてしまったとか。



写真-5 明治 4 年の神戸大津波（神戸市立博物館蔵）

写真-7 は明治時代後期の鯉川筋で、中央突き当たりの場所には、中国系の両替商の店などがありますが、現在は道路になっています。このあたりは居留地に隣接するため、「EXCHANGE」(両替)の看板が何枚か見えます。



写真-6 明治初期から中期、メリケン波止場から鯉川筋を眺めた風景  
鯉川吐口が見える。左の建物はヒョーゴホテル  
(『外国人居留地と神戸』から引用)

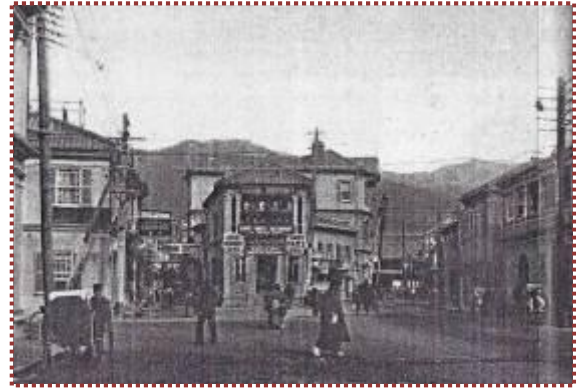


写真-7 明治時代後期の鯉川筋  
(『外国人居留地と神戸』から引用)

ヒョーゴホテルは、その後日本郵船に買収され、ホテル跡地には大正 7 (1918) 年に旧日本郵船神戸支店の社屋が曾禰達蔵・中條精一郎の設計により建てられています。

建築当初は屋上に銅葺きの屋根と円形ドームがあったそうですが、昭和 20(1945)年の神戸大空襲で焼失しました。このビルは、阪神・淡路大震災の前年に耐震補強工事を実施していたことから、軽微な被害で大震災を乗り越えることができたそうです。

平成 31 (2019) 年 4 月、ビルの所有者が日本郵船から地元の日本港運に変わり、令和元 (2019) 年 10 月 1 日にビルの名前が「神戸メリケンビル」に変わりました。

写真-8 の建物「神戸メリケンビル」が建っている所は、ちょうど鯉川河口の右岸側で、慶応 4 (1868) 年 7 月、ここにアメリカ領事館が開設されています。

居留地の建設が遅れたため一時的なものとして居留地西側の雑居地に置かれたものです。領事館は、その後居留地の街路・区画整備の完了を待って居留地五番館に移転しています。

そして、移転理由は不明ですが、明治 14 (1881) 年から 10 年間は、居留地十五番館※2 をアメリカ領事館として使用しています。



写真-8 神戸メリケンビル

※2 居留地十五番館：旧居留地に唯一現存する居留地時代 (1868 年～1899 年) の建築物で、国の重要文化財にも指定されており、当時の街区境界の煉瓦塀や石柱などとともに保存されている。

現在は株式会社ノザワの所有になっている。平成 7 (1995) 年の兵庫県南部地震により全壊してしまったが、元の建材で明治時代の建築技術および最新の免震技術を導入した復元工事が行われ平成 10 (1998) 年に完成した。この工事のとき、創建当時の塗装色に変更され、木柵と門扉も再建されている。

館の東玄関脇の歩道には、日本最古の近代下水道である「旧神戸居留地煉瓦造下水道」(工事期間 1868 年 - 1872 年) の遺構 (国の登録有形文化財) が展示されている。(『ひょうご水百景』No.69 参照)



写真-9 旧居留地十五番館

## ■ モノローグ

鯉川筋は、かつての国立移民収容所※3（現・「海外移住と文化の交流センター」写真-10）とメリケン波止場とを結ぶ道で、多くのブラジル移住の方々が歩いた道として知られています。

明治 41（1908）年に神戸港からブラジル移住船の第 1 号として笠戸丸が出航、昭和 46（1971）年の最後の移住船（ぶらじる丸）までに 640 隻が往復し、ブラジルを中心とする南米に約 25 万人が移住したとされています。それにしても「国立移民収容所」なんて誰が名付けたんや！

イペの木（写真-12・13）はブラジルの国花で、平成 20（2008）年の「ブラジル移住 100 周年」を記念して、みなと公園の他かつてブラジル移住する方々が歩いた鯉川筋沿いにイペの木が 40 数本植樹されています。

筆者は長らく神戸に住んで、鯉川筋もよく歩いているのですが、イペにはまったく気づきませんでした。



写真-10 海外移住と文化の交流センター

※3 国立移民収容所：昭和 3（1928）年 3 月、ブラジル移民の保護と教養を目的として、国立神戸移民収容所（内務省神戸移民収容所）が設置された。この移民収容所は石川達三の小説「蒼氓（そうぼう）」の舞台となった。昭和 7（1932）年に「神戸移住教養所」と改称された。戦後、移住事業の再開に伴い、昭和 27（1952）年に外務省の「神戸移住斡旋所」として再開した。移住者の減少により、昭和 46（1971）年 5 月 31 日に最後の南米移住船「ぶらじる丸」が出港したのに伴って閉館した。平成 7（1995）年 1 月の阪神・淡路大震災の発生当時は空きビルで、同年 4 月から平成 11（1999）年 9 月まで被災した神戸海洋気象台がこの建物を利用していた。平成 21（2009）年より神戸市立海外移住と文化の交流センターとして用いられている。



写真-11 4 月中旬に約 5cm の大きさの黄色い花をつけた。



写真-12 みなと公園のイペの木  
（10月下旬）



写真-13 みなと公園のイペの花  
（4 月中旬）

### イペ

ノウゼンカズラ科の広葉樹。別名バオロベとも呼ばれる中南米原産の高木。イペとは南米先住民語のトゥピ語で「皮の厚い木」を意味する。年輪や杢目に乏しく、南方材らしく密に詰まった材質をしている。色は薄褐色から暗色の帯のものまでかなり幅広く、辺材は黄白色である。腐りにくい反面加工しづらく、ドリルで穴あけしないとビス打ちも困難なほど硬い。水につけても腐りにくいが、乾燥すると割れたり狂いが出やすい。シロアリや湿気に強い。気乾比重は 0.91-1.20 であり、水に沈むハードウッドである。花は 4～5 月に葉に先立って枝の先に群がるように咲く。花色は赤、紫、白、黄、桃色などがあり、黄色の花はブラジルの国花とされている。また、黄色のイペは薬用植物として知られているほか、材は高い強度と耐久性があり、デッキ材などに用いられる。

【参考資料】

- 1 『鯉川水系河川整備基本方針』 兵庫県 平成 29 年 7 月
- 2 『外国人居留地と神戸』 田井玲子 平成 25 年 11 月
- 3 『元町マガジン〜昔の元町通』 神戸元町商店街 HP 平成 22 年 9 月  
<https://www.kobe-motomachi.or.jp/motomachi-magazine/motomachidori/motomachidori27.php>
- 4 『神戸居留地の 3/4 世紀〜居留地文化の素顔』 加藤隆久 平成 5 年 4 月
- 5 『新修神戸市史・行政編Ⅲ〜都市の整備』 神戸市 平成 17 年 3 月
- 6 『東海道本線歴史的痕跡探訪記 〜灘-神戸間編 大正浪漫〜』 平成 31 年 3 月  
<https://4travel.jp/travelogue/11245946>
- 7 『神戸外国人居留地』 のじぎく文庫編集 昭和 55 年 3 月
- 8 『論ひょうご〜記録された明治の「津波」』 神戸新聞 NEXT 平成 31 年 2 月  
<https://www.kobe-np.co.jp/column/ronhyogo/201902/0012055519.shtml>
- 9 『メリケン波止場、神戸外国人居留地、旧居留地十五番館、神戸郵船ビル、神戸移住センター、イペ』  
フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
- 10 『神戸からブラジルへ、移民の歩み伝える花「イペ」元町で見頃迎える』 朝日新聞デジタル 令和 4 年 4 月  
<https://www.asahi.com/articles/ASQ4P6W0JQ4NPIHBO1Y.html>

※発行：令和 6（2024）年 4 月 『ひょうご水百景』 No.194

改訂：令和 8（2026）年 7 月 『ひょうご水百景』 No.194